

十二童子相接取炬、下海附火、諸童子履潮如地、入地如水、震上大石、以火燒推、炎揚達天、其形朦朧、所饒飛、其間經旬、雨灰滿部、仍召集諸祝刀禰等、卜求其祟云、阿波神者、三嶋大社本后、五子相生、而後后授賜冠位、我本后未預其色、因茲我殊示、惟異將預冠位、若禰宜祝等不申此祟者、出危火將亡禰宜等、國郡司不勞者、將亡國郡司、若成我所欲者、天下國郡平安、令產業豐登、今年七月十二日眇望彼靈島、烟覆四面、都不見狀、漸比辰近、雲霧霽朗、神作院岳等之類、露見其貌、斯乃神明之所感也、
日本紀、天武天皇十三年十月壬辰、是夕、有鳴聲、如鼓聞于東方、有人曰、伊豆島西北二面、自然增益三百餘丈、更爲一島、則如鼓音者、神造是島響也、とあるは今いづれの島とも知がたし、故こゝに附して後勘をまつ、

神位 官社

續日本後紀、承和七年十月丙辰、奉授伊豆國無位阿波神從五位下、以伊豆國造島靈驗也、文德實錄、嘉祥三年十月壬子、伊豆國阿波神授從五位上、同年十一月甲戌朔、詔以安房神列於官社、仁壽二年十二月丙子、加伊豆國阿波神正五位下、又齊衡元年六月己卯、加伊豆國阿波神正五位下、同位並出、不詳

志理太乎宜神社

志理太乎宜は假字也○祭神素戔鳴尊、志○白田村に在す、國志、
伊豆志に、後八幡宮ヲ配ス、貞和三年、棟札ニ、白田來濱神社新羅擁護神也、野州岩船山ト

同神也、と云り、○伴信友云、志理太宜は白田來也、と云るは乎字の脱たる本のあるより附會せしなるべし、乎宜は下に布佐乎宜神社もあれば脱字なるべし、○又云、按素戔鳴尊新羅へ渡り坐シ古事ニヨシアリ、とも云り、

南子神社

南子は美奈美古と讀リ○祭神詳なラサ○三宅島神着村に在す、今御笏明神と稱す、註考

伊波氏別命神社

伊波氏は假字也、別は和氣と訓べし、○祭神明か也○君澤郡梅名村に在す、今右内明神と稱す、志例祭 月 日、

伊豆志に、慶長九年ノ棟札ニ、天石門別又名櫛石窓亦神石窓此御門之神也トアリ、と云り、

神位

國內神階記云、從四位上いはいはてわけのみこ、

穗都佐和氣命神社

穗都佐和氣は假字也、○祭神明か也○在所詳ならず

神位

國內神階記云、正五位下はつさわけの明神

大津往命神社

大津往は於保都由岐と訓べし、○祭神明か也○手石村に在す、今王子宮と稱す、志

和の字諸本に
脱す今本に
據て補ふに
陸和の字は
がしと云る
ぞべしと云